

## 尾崎喜八先生と校歌

名取正義

校歌一覧表 (1990年8月16日調査編集)

	校名	所在地	制定	作曲者	備考
1	京華商業学校	東京都文京区	昭 6. 6.27	小松平五郎	
2	立教大学	東京都豊島区	昭 17.12.10	小松平五郎	戦時中の新校歌
3	江別高等学校	北海道江別市	昭 24.2.	平井康三郎	
4	磐城農業高等学校	いわき市植田町	昭 25. 2.10	小松平五郎	
5	信州大松本附属中学校	松本市桐	昭 26. 3.20	小松平五郎	
6	岡谷南高等学校	岡谷市湖畔	昭 27. 3. 1	井上 武士	
7	豊平小学校	茅野市豊平	昭 27. 9.16	保坂 泰正	
8	浅川小学校	長野市浅川	昭 27. 9.17	井上 武士	
9	甲府西高等学校	甲府市鶴田町	昭 27.10.	平井康三郎	旧甲府第二高校
10	豊科高等学校	南安曇郡豊科町	昭 27.10.26	中田 喜直	
11	大町北高等学校	大町市	昭 28. 3. 7	安部 幸明	
12	源池小学校	松本市県	昭 29.10.15	箕作 秋吉	
13	南相木小学校	南佐久郡南相木村	昭 29.11.28	江崎健二郎	尾崎補修
14	木曾東高等学校	木曾郡木曾福島町	昭 30(推定)	井上 武士	生徒会会歌
15	富士見高等学校	諏訪郡富士見町	昭 31. 7.21	平井康三郎	
16	日義小学校	木曾郡日義村	昭 32. 3.14	平井康三郎	
17	日義中学校	木曾郡日義村	昭 32. 3.14	平井康三郎	
18	松代中学校	長野市松代町	昭 34. 5.23	中田 喜直	
19	富士見高原中学校	諏訪郡富士見町	昭 35.11.14	岡本 敏明	尾崎補修
20	入山辺小学校	松本市入山辺	昭 37.11.15	團 伊玖磨	合併昭49山辺小学校
21	永明中学校	茅野市塚原	昭 38. 9.	中田 喜直	
22	新潟東工業高等学校	新潟市竹尾	昭 38.12.17	小山郁之進	
23	美和小学校	上伊那郡長谷村	昭 39. 2. 4	小山 清茂	合併昭51長谷小学校
24	岩村田高等学校	佐久市岩村田	昭 39. 6.25	高木 東六	
25	塩田中学校	上田市中野	昭 39.11.	團 伊玖磨	
26	長野工業高等専門学校	長野市徳間	昭 42. 5.10	今井 光也	
27	牧郷小学校	上水内郡信州新町	昭 42.11. 1	松本民之助	合併昭57中央小学校
28	安曇小学校	南安曇郡安曇村	昭 45. 3.14	飯沼 信義	
29	鉢盛中学校	東筑摩郡朝日村	昭 46.12.17	小山 清茂	
30	富士見小学校	諏訪郡富士見町	昭 47.11.15	和田 則彦	

信州富士見高原に尾崎先生の詩碑「富士見に生きて」が建てられて、今年で早くも満十年になります。八月二十六日、第十一回の尾崎祭碑前の集いが催されました。高原の晩夏というのにこの時期としては珍らしく真夏の暑さを感じる高原の森で、実子夫人他多数の参加者をお迎えして先生を偲ぶひととき、先生のお声で「かけす」「田舎のモーツァルト」の詩の朗読がスピーカーから流れると、眼が何か異様にキリッとし、反面気持がおだやかになるのを感じました。今回は、地元高原中学校生徒三十名による校歌斉唱と、東京のメンネルコール広友会七十名が特別参加され、尾崎喜八詩・多田武彦作曲の「かけす」「音楽的な夜」の二曲の献歌があり、最高に盛り上がりを見せ、有意義な集いでした。その席上で、先生が作詞された校歌の調査結果を発表しましたのでご報告致します。

### 校歌詞にみる尾崎喜八の風格

表をご覧下さい！先生の作詞された校歌は、なんと三十校に及びます。昭和六年の京華商業学校校歌から昭和四十七年の富士見小学校校歌に至るまで、四十有余年の間、殊に戦後の北海道江別高等学校から二十三年間に二十八校の作詞をなされたことは、なにか耳目を疑ぐるものがありました。一校一校段階を踏んで確認がとれ、一步また一步と深みに入る思いがして、言い知れぬ興奮を覚え、一人胸に秘めて眠れぬ夜もありました。

三十校の校歌は長野県内が断然多く、小学

校、中学校、高等学校を合わせて、地区毎に北信四校、東信二校、中信十校、南信七校の計二十四校にのびります。そこで長野県下を中心に、校歌が制定される過程をエピソードなど含めて数校を引用してご紹介致します。

古くは川中島合戦で知られる海津城があり、真田藩であり、佐久間象山等著名人を輩出し、松代大本営、地震観測所等で有名な長野市松代町、城趾の根方にある松代中学校。この学校の昭和三十四年発行生徒会誌第五号に、校歌ができるまでの項があります。「校歌がほしい、というの創立以来五年越しのねがいである。生徒総会に持ち出されたこともある。先生たちの職員会でも屢々話題に上った。校歌というものは、やはり慎重に考えてゆきたい、というのが学校の態度であった。校歌があったらなあ、：」「一月、校歌作成の為に準備委員会が先生たちによって組織された、：善光寺平各中学高校の校歌が集められた、：善光寺平各中学高校の校歌が集められた、先輩の協力を得て都合四十校ほどになった。：「校歌というものはむずかしいものだ」というのが検討の末に得た委員一同の感想であった。心のおもむくままに自由にうたい上げる詩ではない。我々の愛する郷土や、歴史や、学ぶ者の理想などもなるべくよみこみたい、というのが普通であろう。となるといきおい制約がともなう。：校歌の作詞作曲者は単に技術がすぐれていればよい、というわけにはいかない。立派な芸術家、だけでもまだ足りない。その上に、人間としてもすぐれた生涯

をつらぬき、あるいはつらぬきそうな人、という条件を加えて、尾崎喜八先生に詩を、中田喜直先生に曲をご依頼することになった。そして二月上旬には中村校長が上京され、尾崎先生のご快諾を得ました。先生は二月二十六日に松代へ行かれ、二日間に亘って地域を視察され、懇談を重ねられました。先生のすぐれた詩人としての風格は、接する人たちに深い感銘を与えました。

みどり松代朝あけて 信濃の山河さやかなり  
飯綱高くまなかに 歴史は長き千曲川：

「詩を見せていただいた時、まったくすばらしいと思えました。校歌は校風の理想であり象徴です。実現までこぎつけたそのファイトを忘れずに今後も一層全会員が：」と先輩からの激励の言葉も寄せられています。五月二十三日、尾崎、中田両先生が出席して盛大な校歌記念演奏会が行われました。

旅の心は寛容だから

他郷の自然や人間から

容易にその美を発見する

人生は旅だ

家にあっても この心を失うまい

先生は松代所懐として色紙に認めています。

また東信の千曲川上流にある岩村田高等学校の場合も、男子校、女子校両校が昭和二十四年統合され、どちらの校歌をとるか、或いは新しい校歌を制定するかで決めかねて、校歌のない時代が続いたのです。『浅岳』第五号に生徒会顧問の先生の言があります。

「創立以来既に半世紀、長い伝統と歴史を有する本校に於て、旧岩中、旧岩女、夫々の校歌を内蔵する。しかも二十二年以来、学生歌「大浅岳」を我等がアルマメータとして、相継ぎ相伝えて来た。今ここに新しい校歌を設けることの困難なことは、如何に生徒会に熱望ありとは申せ想像に難くないのである」。

しかし昭和三十八年七月の職員会で慎重審議を経て、校歌作成準備委員会が設けられ、校歌の在り方をめぐって、伝統と前進、懐古と革新、百出する論議の中で難航を重ねたすえ、新校歌を作ることが決定され、作詞依頼候補として尾崎喜八、三好達治、大木惇夫の三氏、作曲は高田三郎、小山清茂、清水脩の三候補者が上げられ諸氏の略歴が紹介されました。そこで佐久に最もゆかりのある尾崎喜八先生に交渉することに決り、校長と委員の一人が十二月二十二日に上京して先生の快諾を得たのです。但し作曲者には尾崎先生の強い要望で、高木東六先生に依頼することになりました。尚、岩高誌によると、

教えの一句一句が浮き出ています。学を深めて、身は直く、心に徳を育めと……は学生の根本精神であり、私の好きな歌詞でありますとのべています。

尾崎先生には、ご自分の詩に解説を加えられた、すばらしい『自註富士見高原詩集』がありますが、校歌の作詞でも必ず歌詞に添えて、ご自分のお考えを書かれて学校へおくられています。長野県下で最初に作詞されたのは、昭和二十六年三月で、長野師範学校女子部附属中学校が信州大学教育学部松本附属中学校に生れ変わる時でした。先生は手紙の中で、「……歌詞については別段註釈を施す程の事もないと思いますが、第一節初めの「王が額」は勿論、美しヶ原高原「王ヶ鼻」の意味でありまして、「鼻」では歌としてどうかと思ひあの山の形といい、その立派さといい、寧ろ王者の額に如かないと考えた結果であります。又ところどころに類音を用いてあります。たとえば、第一節の初めの、あしたアルプス、三行目、信濃おとめとおのことここに、第二節初めの、梓ならいのながれにうつる、二行目、むかしふかしのいまはまつもと、第三節初めの、もゆる春辺のもちの花は、などこれは歌曲となって歌う場合或種の魅力になることです。作曲者へは清らかに、男々しく、勇ましくと註文を添えて置きました。……と記され作曲には一番古くからの友、小松半五郎（小松耕輔氏令弟）先生を選ばれています。校歌及び団歌等を通じて、この時すでに八曲

目のコンビというべきでしょうか。

作詞者の言葉として一番多く語られたのは、やはり松本の入山辺小学校の時でしょう。

「むかし美しヶ原では詩を書いたし、いま入山辺の学校の校歌を作ることになったことについては、その縁のまことに浅くないものを感じずにはいられない。校長さんと教頭先生のご案内で、学校や地区の環境、その自然、文化、農作等、種々の景観を私なりにくわしく見て、感じて、そしてこの校歌の歌詞は出来上がった。校歌は母校への愛と尊敬との表現であるべきだから、郷土の美を強調しながら常にその中へ学校のすがたを浮かび上がらせた。まだ作曲は見えていないが、この気持をくんで、きつと美しい旋律で満たされたものが出来たことと思う。まことにご同慶の至りである」とお手紙を送られています。作曲者は團伊玖磨先生です。三十七年十一月十五日の発表会当日、お二人が招かれて出席され、その席上團先生は次のように話されました。「尾崎先生のすばらしい歌詞をいただいて、僕は一生懸命作曲しました。作曲をする時には、いつもペンで音譜を書くという仕事の前に、言葉を全部よく覚えて、その言葉のイメージといえますか意味に合った曲を作ること心にかけています。昨日入山辺へ伺って、つくづく歌詞のとおり場所だと感じました。そして普通の校歌とちがった歌詞のすばらしさがわかりました。山がお好き、信州がともお好き、そして松本平を愛しておられる、その気持が、このすばらしい言葉になったの

だと私は思います。歌詞にありますように、大きな樹のように立派に真つすぐ育つてくたさることをお祈りします。こうして開校後五十二年目に、入山辺の自然の美しさ、民情、理想をみごとにとらえた三番までの校歌が生まれ、山の子らは力いっぱいよろこびの声をあげたのです。

なお松本平薄川<sup>すずき</sup>べりの源池<sup>げんち</sup>小学校では、二十九年十月に新校歌が制定され、先生の講演に引き続き児童一般、満員の聴衆の中でNHK専属作曲家箕作秋吉先生の校歌についての解説があり、NHKうたのおばさん松田トシさんの歌の指導で、すばらしい発表音楽会が行われました。その折に「この校歌は第二節に、高揚した気分をみなぎらせ、源池小学校の歴史的な伝統や自然環境をたたえ、愛正剛の気風、楽しく学ぶ小学校という期待をもって」と尾崎先生は語り、箕作先生も「この曲は二部形式でやはり二節目を強調した。伴奏はすぐに混声合唱になり拍子も二拍子・六拍子用に遠足などにも楽しく歌えるように」と話された。なお松田トシさんは美しいハーモニーをもち、気品の高い校歌であると評しました。

### 「山の詩人」としての尾崎喜八

中信地区が早くから尾崎先生と親交があったのは、講演会の開催は勿論のことながら、やはり山とのかかわりが非常に濃いためだと思えます。昭和二十二年六月、日本山岳会信濃支部が結成されて、初代支部長にはスイス

アイガー東山稜初登攀に成功された榎有恒氏、そして二十五年春から尾崎先生が二代目支部長をつとめられました。国体の役員として学生等とともに山に登られ、上高地のウエストン祭を盛り上げ、そして信州の高原と山とを格調高い詩文にうたいあげました。そのゆかりの上高地には「山に祈る」の塔があります。

### 流転の世界

必滅の人生に

成敗はともあれ

人が傾けて 悔いることなき

その純粋な 愛と意欲の美しさ

北アルプスの山々より流れ出る梓川の清流が、深い島々谷を下って安曇平に注ぐその口元に安曇村島々があり、梓川左岸の段丘上に安曇小中学校があります。昭和六十二年に新しく装いのなったすばらしい校舎、前庭の校歌碑、そして玄関に作られたガラス戸棚には、当校の親善訪問地スイス国グリンデルワルト村での写真と、ベレー帽を冠った在りし日の登山家尾崎喜八の遺影が飾られ、校歌の作詞者として紹介されています。上高地と尾崎先生、尾崎先生と安曇村の人びと。先生と二十年来の親交を得ていた岳友の青柳氏をはじめ前田村長、PTA・村民一致して、先生に校歌の作詞をお願いしました。鎌倉へお訪ねした青柳氏は「眼光の鋭い、神経の繊細な尾崎先生ですが、遠来の岳友を温かく迎えて下さり、赤土の剥き出した岡の上で、いつまでも別れの手を振ってくださいました老詩人の姿は、今

もって私の脳裏に鮮明です」と述べています。作曲は地元安曇野出身の飯沼信義先生です。

大町北高等学校卒業生のOさんは、北校校歌について「安曇野の素晴らしい自然に育まれ、高い理想を抱いて過す若人たちの学舎の姿が、この校歌には余すところなく歌い尽されています。時は移り、友垣は遠くはるかになった今も、私の若き日の心と夢をはぐくんだ母校と校歌を、私はいつもなつかしく思い返しています」と言いました。

この話を聞きながら、心をこめて先生が作られた各学校の校歌が、たとえ世の中の気風が遷り変わっても次の世代を背負う若い人びとに歌いつがれ、伝統・校風と共に心の糧であり、生きることの喜び、希望の支え柱であって欲しいとしみじみ思ったのです。

校歌にまつわる多くのエピソードがありますが、ここで制定とその記念事業の一端について先生ご自身の随筆がありますので、是非皆さんにご紹介したいと思えます。芸術新潮「音楽と求道(四三年〜四七年毎月連載)」の中から「この夏に校歌の作成を頼まれた松本平の某中学校のために、その発表会と校歌碑の除幕式に参列するためだった。作曲者は信州出身(更級郡)の小山清茂君で、彼自身にも気に入ったような良い歌が出来た。二人は松本の駅頭で久しぶりの再会を喜び握手をした。彼とは六、七年前にも自分の書いた校歌の歌詞に大変見事な曲をつけて貰った因縁があるのである。三日間の旅行中、信州の天気は毎

日美しい冬晴れだったが、わけても発表会当日は一日じゅう雲一つない快晴だった。会は秩序をもって盛大に行われ、男女の生徒全員が混声合唱が実に堂々として壮大だった。そしてこれに聴き入っている教職員や父兄の顔は晴ればれと輝いていた。なかにはまぶたを拭いている人さえあった。私も思わずほろりとした。それほどけなげな合唱ぶりだった。

校歌碑の除幕式は、正面玄関前の岩石公園とも言うべきいくつかの巨大な石に飾られた広い庭園で行われた。碑は若い白樺の木に囲まれて、小高い芝生の上に毅然として立っていた。私の手で書いた校歌を刻み込まれた石は、スウェーデン石という黒い堅い岩石で、念入りに磨かれてつやつやと光っていた。そしてその前方に整列した全校生徒の力強い合唱の開始を合図に、白い幕は私と小山君との手で取り除かれた。感動的な一瞬だった。…やがて私は祝宴から独り席をはずして、長い廊下を玄關まで出て庭を眺めた。すると上級の女生徒が六、七人まだ碑の前を去りやらずに、芝生の夕日に照らされて佇んでいた。遙か南の諏訪の空に八ヶ岳がくっきりと全容を現わし、東の正面には赤々と夕映えに染まった鉢伏・美しが原・武石・袴越しの峰峰、そして西の背後には逆光の中にそり立つ穂高から白馬まで北アルプスの連峰があった。私は自分の歌詞が自分の筆蹟がそして自分の名が、此処にこうして半永久的に残ることを考えて、嬉しいような、悲しいような一種複雑な感慨に襲われるのだった。…」これは東筑摩郡

鉢盛中学校のことで当時の校長は当日松本駅でお見送りの際、先生がもう一度鉢盛を訪ね校歌碑の前に立ちたいとおっしゃられ、再度お出でいただくことをお約束しながら、お亡くなりになられてしまい、まことに残念ですが、先生の心は当校の校歌として、いつまでも生きつづけることでしょう、と述懐された。

いたるところの歌「木曾の旅」の文中で先生は、木曾義仲成人の地、宮の越の日義小学校と中学校両校の校歌をかかって作られたのちに講演に寄った時、子供たちの喜びと同感のために鳴らしてやろうと思って、二つの由緒ある鈴をポケットに忍ばせておいた。しかしざという時、彼らの歌ってくれたその校歌の合唱のあまりけなげで美しいのに感動して、ついうっかり鈴のことを忘れてしまった。『木曾川いまだ源の、清冽うたう宮ノ越…』平井康三郎さんの作曲がまた実に見事だった。と記した部分があります。作曲家とのコンビが校歌でも不可欠なことは言うまでもありません。平井先生は戦後最初の作詞である北海道江別高等学校、二十七年甲府第二高等学校（西校）、三十一年富士見高等学校と全部で五校の校歌コンビとして縁の深い方です。

#### 山間部校の閉校・統合にお残る詩魂

時の流れの変遷は、ついに長野県下でも山間地人口の過疎化をもたらしました。昭和四十年代後半から五十年代前半にかけて、当然児童数の減少が学校の廃校、閉校、合併、統合を余儀なくしました。学校は地域において

は教育、文化の泉であり、住民友好の場でした。ましてや長い伝統と歴史をもつ学校は地域の人びとの心を培ってきたものです。上水内郡信州新町の牧郷まきさと小学校が、上伊那郡長谷村の美和小学校が、そして先に紹介しました松本市の入山辺小学校がそれでした。

犀川沿い景勝の段丘上に閉校した牧郷小学校跡は今もありません。古い校舎前に高さ約二八〇センチ、幅九〇センチ、厚さ約二四センチ、台石約七トン。上部に校章をあしらいつづいて「牧郷小学校跡」と大書し刻まれています。その左方に尾崎先生の作詞になる自筆の校歌碑が石に刻まれて立っていました。牧郷閉校誌によれば初雪の降った昭和四十二年十一月二十二日村を訪れ村まわりをし、生き生きと児童にお話をなされ、校歌にもりこむ内容を子どもに問いかけられた。山のこと、犀川のこと、歴史の古いこと、四季の美しさなどを歌の中にもりこむことを約束して帰られたよう、翌年一月十一日「明けゆく朝の山の色、犀川清く谷深い、この牧郷をふるさとと、呼ぶは我等の喜びぞ」の校歌が到着したのです。しかし幾多の沿革を経て百八年、一世紀余に及ぶながい歴史を残してついに五十七年には閉校となったのです。

天竜川上流の三峰川の右岸段丘上の美和小学校の場合、昔、孝行猿の物語で有名な伊那里の小学校を吸収合併しました。長谷小学校となって校歌もかわりましたが、玄関前の校庭には「少年よ少女よ、この美しい郷土から、大いなる世界が、おんみらにひろがる」美和

学校九十周年記念碑言葉並書尾崎喜八という大きな碑が建てられています。

松本市街を流れる薄川は、美し々原山麓から下って奈良井川に合流します。この川に沿っては松本城よりも、もっともっと古い歴史を語ることが出来ます。先生はこの河岸段丘沿いに扉峠から美し々原へ入られたこともあり、景二、「登リツイテ不意ニ開ケタ眼前ノ風景ニ、シバラクハ世界ノ天井ガ抜ケタカト思ウ。」という有名な詩が美しの塔にはめ込まれています。その山ふところ、美しい自然に恵まれた平和な村の学校が入山辺小学校でした。明治四十四年開校以来今日(昭和四十九年)まで六十余年、学びの庭も閉校して薄川下流里山辺小学校と合併して山辺小学校となったのです。何か割り切れないものがあり、哀惜の情已み難い感があったと地区の人びとは語っていました。そこで区民は一体何をなすべきかを自問自答し、学校所在のあかしとして後世に残るものを造り、思い出と郷土の史跡を、の願望を結集して校歌碑を建てることに決めたのです。郷土の銘石山辺石へ、先生自筆の文字を銅板に焼付けてはめ込んだ、高さ三メートル幅三メートルにもなんなんとする堂々たるいしぶみで、校歌碑というよりも、モニュメント、記念碑なのです。閉校式委員長長の赤羽さんは「今後私共は、いかなる立場にあっても、いかなる地位になっても、何時も此所に来て、この碑を仰ぐたびに、育てられた郷土を思い、勉強した学校を思い、指導してくれた先輩を思い、遊んだ旧友を思い、

教訓をいただいた恩師を思い浮べて感謝しよう。そして地区の後継者である児童等の、健全な成長をいつも見守ってくれることを願って」と述べています。校庭の本来ならバックネットを建てる大切な一隅に西方へ向けて建てられた校歌碑。木々の葉がぼつぼつ色づいてきた深い谷あいの段丘上に西日が落ちる、その最後の光に金色に輝いている碑面の連々とした文字の美しさ。私は思わず「夕映に立ちて」を身体一杯に感じ、目頭がうるむいしれぬ感動を覚えたのです。

#### 有終の美 信州富士見高原にて

戦後、尾崎先生は信州富士見高原にこられた。なだらかで広大な八ヶ岳山麓、その分水荘の森の中で、お疲れになられた心身を癒しておられた。高原を散策するうちに、元来の自然を見るたしかな眼と高潔な誌魂が甦って、忽ち心身の恢復を呼んだのです。翌二十二年にはこの森に遊ぶ子供らの為に「高原の子供の歌」をスウェーデン民謡「美しきヴェルメラント」につけて作詞されました。

山立ちならぶ信濃の国、  
われは愛すこの国を。

春風吹けば鬼つつじ  
咲く八ヶ岳の裾野、

ここに生れて、ここに育ち、  
遠き他国は知らねども、  
愛す、うるわし我が里。

白樺そよぎ、空は青く、  
風は涼し、夏の日も。  
さえざる小鳥家に近く、  
遊ぶ池に映る雲。

ここに育ちて、ここに学び、  
いつか都に帰るとも、  
思え、たのしかりし日を。  
(三番略)

先生ご夫妻が七年間住われた富士見村の人里はなれた分水荘の森に住む二組の兄弟のために作られたこの「高原の子供の歌」の心が、二十五年間温存されて、昭和四十七年の秋に富士見小学校の校歌の骨子となったのではないでしょうか。

先生が一番初めに作られた校歌は、出身校の京華商業学校の為のものでした。そして最後の作となったのが、先生が第二の故郷と言われた信州富士見の小学校校歌だったので、この不思議なめぐりあわせは、或いは先生にとって当然の帰結なのかもしれません。そして校歌の発表が行われた昭和四十七年十一月十五日、この日の為に夫人を伴って出席された先生にとってこれが最後の富士見となるのです。

当時の五味校長をはじめPTA諸兄の努力と地域住民の皆さんの協力によって、この奇縁をつくり上げて下さった事に敬意と感謝を表するものです。

校歌発表の式典のあと職員玄関の上にあつた裁縫室で、尾崎先生と実子夫人、それに作曲者和田則彦氏(富士見小出身)出席のもと、

学校職員とPTAそして同窓生が場所も狭しと一堂に会し、校歌制定と校歌碑建立の祝宴が催されました。先生は尽きぬ思い出の中で終始感動の涙、涙、涙が拭いきれず、奥様が脇からハンカチを渡していられるのを見て、我々もともに涙を流したのでした。忽ち時もすぎ、誰歌うとなく誕生したての校歌を「連なる峯は八ガ岳、はるかに高い富士の山：」と歌い出すと、会場の全員が以前より覚えていたかのように、すらすらと「空気は清く光ゆたかな、ここは信州富士見高原：」と声高らかにうたい、共々涙して興奮の渦の中、一大合唱となったのです。

昭和四十九年二月

「山深い信州の当地にお出で願ひ校歌の作詞をいただいた先生は今もここに生きています。つつしんで先生のご冥福を祈ります」

—マキサトシヨウガッコウ—

長野県上水内郡信州新町牧郷小学校からの  
弔電でした。

私は、尾崎家から提供された、先生ご葬儀の折に寄せられた各学校からの弔電をもとに、探索の旅をつづけて参りました。その間、各学校の関係者新旧の方々に一かたならずお世話になりました。誌面を借りて改めてお礼を申し述べます。そしてこの他にもまだ我々の知らない未詳の先生作校歌があるのかもしれない。今後共研究会各位のご協力をお願い申し上げます。（平成二年十一月）